

ウクライナの著名な詩人オスタップ・スリヴィンスキー氏が、英訳すれば『Dictionary of War』という本を著した。スリヴィンスキー氏は、1978年ウクライナ西部の都市リヴィウに生まれ、詩人として幅広く活動している。2022年2月のロシアによる侵攻後、まず軍隊に入ろうと志願したが、多くの志願者がいたため入隊は適わず、戦争被災者を支援する活動を続けた。その中で出会った人々が語る言葉に耳を傾け記憶し、家に帰ってそれを原稿にまとめ、2022年に本書を出版した。21人の語った77の言葉と物語がまとめられた「文藝ドキュメント」である。既に、何か国語にも翻訳されている。その英訳をもとに、日本文学研究者ロバート・キャンベル氏が日本語に翻訳し、『戦争語彙集』というタイトルで、2023年12月に「岩波書店」から出版している。翻訳にあたりキャンベル氏は、2023年3月にスリヴィンスキーと直接オンラインで連絡をとり、6月には実際にウクライナに出向き2週間にわたり取材をした。日本語の本文はウクライナ語のABC順に並べられているようで、辞書の形態をとっている。「戦争語彙」と聞けば、キャンベルも書いているように、日本では、「焼夷弾」「空襲」「学徒動員」「疎開」「配給」などの言葉を思い浮かべるだろう。本書にまとめられている戦争語彙は日常的な言葉である。ロシアの侵攻を受け、生活は一変し、死の恐怖に怯える状況にあるが、普通の言葉で、実に美しく、ユーモアをもって綴られている。さすが、詩人の編集だと思わされた。「帯」に桐野夏生氏が「わたしたちは言葉によって救われ、言葉によって守られる」と書評しているが、言葉の持つ力を改めて感じさせてくれた。大きな感動と勇気を受けたので、戦禍を負わされた証言者たちの生きた言葉を断片的ではあるが、名前と在留地を省略して紹介し、私の感想を書きたい。

「〈おばあちゃん〉 おばあちゃんたちは日がな一日玄関前のベンチに座っていました。で、そこで、破片に当たって死んでしまいました。砲弾が降り注ぐ合間を縫って、私たちは中庭に穴を掘り、二人を葬りました。」ウクライナの日常なのである。「〈妊娠〉ところでキーウから逃げようとした時点ですでに妊娠二カ月でした。チェルウツィに着いたところでわたしの妊娠はぴたりと終わりました。医者聞いたけれど、戦争が始まったときから診ている妊婦の三人に一人は、同じように、先にこの世を去ると決めた赤ちゃんを身ごもっているそうです。医者になって三十年間、こんなことは見たことがないそうです。」生まれるべき人が生まれて来られない残酷な現実がある。「〈シャワー〉激しい砲撃を浴びている最中のシャワーはマジでおススメしない。すべてのお楽しみは台無しだ。いつも頭をよぎるのは、今もし砲弾を食らったらどうなるの？ってこと。ケツも泡だらけの、むき出しの戦争犠牲者さ。」のんびりシャワーを浴びていると、おしりに泡を付けたまま、死んでしまう。「〈生〉ピンクの毛布にくるまって座っている人を見かけました。日向ぼっこをしているのか、と思ったら、ベンチの上にもたれかかって不自然な恰好で倒れるのが目に入りました。今年の三月八日、女性たちは生と死が配られることになりました。私たちは、生をもらいました。」生と死は隣り合わせで、今は生を得ているが、いつ死に襲われるかは分からない。「〈歯〉奴ら（ロシア兵）は、彼を捕え、拷問にかけ、歯という歯をへし折ってしまっていたんですね。彼は今、わたしたちの学校に身を寄せています。子ども用の毛布から長い脚を出して、マットレスの上に寝そべっています。まるで小学生みたいです。けど歯は、もう生えてきません。」拷問で歯を失った彼は、どんな思いで身を横たえているのか。この悲劇に、歯はもう生えてこないと、ユーモラスに描いている。（次週に続く）